



国連のイラク即時撤退という決議が決定された時、サダム・フセインは非常に狡猾なレトリックを使って反論しました。

「ちょっと待てよ。今 世界は我々イラクを非難しているが、イスラエルはどうなんだ？  
イスラエルは、パレスチナのヨルダン川西岸地区とガザ地区の2つを不法に占領してるじゃないか。  
占領してもう23年経ってるぞ。その間に、不法占領しているからと、アメリカは軍事力を使ってイスラエルを追い出そうとしたことが1回でもあったか？ アメリカはイスラエルに甘いんじゃないか？  
イスラエルに対しては不法を見逃しておいて、我々がクエートを取ったと武力行使をちらつかせるのはいかがなものか。それはダブルスタンダード、二重規範じゃないのか。相手によって基準を変えるのか！  
もしイスラエルが西岸地区とガザ地区から即時撤退するなら、その後で我々もクエートから即時撤退する。」

これをリンケージ論と言います。まるで、パレスチナの人たちのためにクエートに入ったかのようなレトリックを使ったのですが、世界の政府の中で（アラブ・イスラム圏の政府の中でも）、サダム・フセインのこの詭弁に賛同した政府は1つ也没有。

だって、彼が言っていることは、武力で他の国を侵略してゼロにしてしまったわけでしょ。  
そんなことを肯定してしまったら、その論理が自分に適用された時“構いません”ということになるじゃないですか。だから、イスラム圏の国々の中でも政府のレベルでは、サダム・フセインのこのリンケージ論に乗った国はどこもないんです。

ですが、一般民衆はこれに踊らされてしまったんですね。特に世界のイスラム圏、東はインドネシアから西はモロッコに至るまで、ほぼほぼ全てのイスラム圏の国々で、サダム・フセインのこのリンケージ論賛成！ということでデモ行進やったんですよ。

一番熱狂したのはパレスチナの人たちです。PLOのアラファトが指導者だった時、「サダム・フセイン万歳！」みたいなこと言うわけですね。バカなこと言ったもんですよ。

だって、クエートが主権回復した時、クエートに出稼ぎに来ていたパレスチナ人たちは、「おまえら、散々世話になって、国がなくなった時は侵略国家／敵に加担したな！」と全部追放です。

アラファトは間違った指導をやり続けて来たんですが、それはまた別の時にお話したいと思います。

とにかく、一般民衆のレベルではものすごく受けが良かったんですね。

これはイスラム圏だけではなく、西側の国々の一般民衆にも「うん、なるほどなあ。サダム・フセインがやっていることは悪い事やけど、彼が言うことの中にも一理あるなあ」みたいな考えの人たちが出て来たんですね。これは日本も一緒ですよ。

なぜそんな風に、サダム・フセインの口車に乗っちゃってしまったのか？

「一理あるなあ」と言うコメンテーターや中東問題の専門家、イスラム研究者・軍事評論家がそれを垂れ流し続けたんですよ。それで、みんなが「そうだよなあ」となって乗っちゃってしまった。罠にはまってしまったんですね。

今でもこの論理は有効です。有効というか、これを利用している人たちがいますよね。

トルコのエルドアン大統領、イランのハメネイ師なんかは、イスラエルはパレスチナを不当占領してるんだと言うことで、落ち目の支持率をアップするという、そういうことを今でもしています。

私は、これはどう考えてもおかしいんだということ、間違い、フェイクを解毒する解毒剤はファクトしかないと思いますので、今日はファクトの部分をご紹介します。3つのファクトです。

◆1 イラクのサダム・フセインは、クウェートから軍事的脅威を一切受けていないのに、一方的に攻め込んだということです。クウェートはイラクに対して莫大な軍事援助、お金を差し上げていたんですよ。50億ドルと言われていました。差し上げたお金以外にももっと莫大なお金を貸し与えて、イラクの戦争に協力してたんです。軍隊出さなかったけど、強力な同盟というかサポートをしてたんですね。

イラクはどこと戦争したかというといらん。イラン・イラク戦争（1980-1988）です。これは不毛の戦争で、最終的に痛み分けなので、イランもイラクも相手国からの戦利品は何もなし。賠償金を取れたわけでもなく、領土が増えたわけでもなく、結局膨大な戦死者と莫大な借金だけが残ってたんですね。イラクが背負った莫大な戦争借金、クウェートがたくさん貸してて、返しきれないわけです。

そこでサダム・フセインは考えました。「クウェートをなくしてしまったら、借金チャラになるじゃない。」それを実行したんですよ。そして、クウェートという“石油の上に浮かぶ国”の油田を自分の物にする。

だけでなく、隣は何ですか？ サウジアラビアですよ。当時、世界最大の石油埋蔵量を誇っていた国です。サウジアラビアに王手、一歩掛けたわけです。中東を自分たちバース党の考え方で塗り潰して統一しよう。いよいよ、その第一段階を踏み出したんですね。クウェートはイラクに脅威を与えてません。なのに、イラクはクウェートを一方的に呑み込みました。

しかし、イスラエルの場合、どうですか？ イスラエルはパレスチナのガザ地区とヨルダン川西岸地区を占領したと言いますがね、占領というのはどうして生じたか。1967年の第三次中東戦争の結果なんです。

第三次中東戦争（六日戦争）はエジプトのナセル大統領が始めた戦争です。ナセルはイスラエルと戦争する時に、ヨルダンのフセイン国王を誘ったんですね。「絶対勝てるから、一緒に戦おうぜ。」エジプトとヨルダンがイスラエルに攻め込んだけど6日間で完全敗北して、それまで彼らが持っていた占領地が、この戦争の結果イスラエルの占領になったということです。

つまり、先に手出しをしたエジプト・ヨルダンとの戦争、イスラエルは防衛戦争で、その結果彼らが持っていた地区を占領することになった、というのがイスラエルの占領なんです。侵略戦争と同列に論じてはならないんですね。

◆2 イラクが占領したクウェートは、れっきとした主権を持った独立国家です。国土・国民・統治政府があり、独立国家で、国連に加盟していました。その国を乗っ取った。押し潰した。しかし、この戦争の結果イスラエルが占領する羽目になった西岸地区とガザ地区は国ではありません。それは、エジプトとヨルダンがそれぞれに占領していた地区です。国ではないです。イスラエルはガザ地区を既に手放しました。ヨルダン川西岸地区は、パレスチナ自治政府が管理している所と、イスラエル政府が管理している所が入り混じった状態になっています。

◆3 イスラエルの占領地区については、国連は安保理決議242号を決議しています。その内容をひと言で言うと、“イスラエルの占領地の将来については、話し合いで最終的に決めましょう。” “とにかく、イスラエルはこの占領地から出て行きなさい” という内容が決議されているんじゃないんです。“安全確保できるようにするために、この占領地を最終的にどうするかについては話し合いで決めなさい” という決議です。

それに対して、イラクが突き付けられた安保理決議は“無条件即時撤退”決議で、話し合いなさいという内容ではないんですね。

ですから、イラクのクウェート占領とイスラエルのガザ地区・ヨルダン西岸地区の占領は、占領という単語／言葉は同じでも、その中身は全く別次元の問題なんです。だから、これは同じように考えてはならない問題なのです。

しかし、占領という言葉が持っているネガティブなイメージによって、“イスラエルはかつてのイラクや、今の中国・ロシアのような膨張主義の不当国家だ” というイメージが振り撒かれるんですよ。それはフェイクです。事実ではない。

この誤ったイメージを持つのは、実は専門家と言われる方が、知ってか知らずか重要なファクトの部分の伏せて、そして一面の事実だけを伝えることによって、間違った結論に導いていってるのではないかなと思います。この誤ったイメージを解毒するのがファクトですね。

もちろん 私が知っているファクトの範囲なんて、もう たかが知れております。自分でもそれがよく分かっております。なので、「高原さん、こんなファクトもあるんだよ」ということがあれば、ぜひコメント欄で教えてください。私は本当のことを知りたいと思っています。それで皆様からも学びたいし、お互い学び合えるようなシリーズになれたらいいかなと考えておりますので、このジャンルについて関心があれば、どうぞこれからも楽しみにしててください。

このシリーズは不定期になると思いますが、折に触れて「フェイクをファクトでぶった斬る！」NHKの何かと似ているので、ちょっとこの言い方は嫌なんですけど。ということで、これからも続けていきたいと思っておりますので、よろしければお付き合いください。

チャンネル登録も、よろしければお願いします。  
ではまた このチャンネルでお目にかかりましょう。それまで皆さん、お元気でいてください。さよなら！